

昭和二十三年五月三日に引揚命令が来て居たので、そこで、叔父が山に迎えに行つたとのこと、叔父も貨物機関車の石炭の所に隠れ夜通し山まで行き我々の帰つたことを聞き、又苦勞して帰つて来たとか、五月四日午後七時、箱型貨車に農家十数戸一緒に乗込んで榮浜を離れたのです、日本に帰るだけでよい、やはりすべてを捨てリュック一つの引揚げだったので。

敗戦、引揚、勲五等受章までの

労苦

北海道 大戸 誠一郎

昭和二十年八月、樺太富内岸沢学校の職員室で終戦を知り、職員、児童教室に集り、このことを皆に伝え、大声で泣きながらの抱き合いであった。

あの時のことがいつまでも心の底に残っていて四十有余年の歳月が流れている。

ソ連軍が富内岸に進駐するということで、先ず国旗

掲揚塔に白旗をか、げたところソ連兵が来て、言葉はよく理解できないが、白旗とは何だ。赤旗をか、げるのだと云う意味のことを荒々しく言うので、赤い布を探し、急いで白旗と取り替え、両手をあげるだけであつた。ソ連兵に剣付鉄砲をつきつけられては、どうしようもない。命だけは助けてほしいとの一念だつた。土足のまゝ、で入り込み、腕時計・万年筆など取られたがどうすることもできない。敗戦の惨めさをつくづく感じさせられた。

家族も何事が起つたのかと心配に心配、家に帰って事情を話してきかせて命だけは助かつたことを知らせ、家族のものもいつどのようなことが起るかも知れないから、覚悟をしておかねばならないことを知らせた。

このようなさわがしい事情が平静に落ち着いてから食糧がなくなり生活が苦しくなつたので、食糧を何とかしてほしいと幾度も幾度もお願いした結果、部落全員に黒パンの配給ができるようになり、学校がパンの配給所となつた。学校の仕事はもちろんであるが

パンの配給も公平にやらねばならないので苦勞も伴う。

ソ連の学校教育局から、日本人学校をすぐ開校せよとの命令で、すぐ学校開校となったが教科書がない。用具もない有様。しかしどうしても開校しなければならぬということで先生方の協力を得て古い教科書を集めなんとか開校の運びとなった。ソ連の視学官が通訳を伴って学校視察をたびたび行った。

不必要とみとめられた箇所は全部削除された。このような有様での勉強であったが、帰国してから学力不足ということではとの心配から先生方も力を合せ働いてくれた。

ソ連の要職にある方から、日本に帰っても職もなし、荒れはてているから、君ならソ連に残っても要職につけるなどと言われたが子供までソ連の国籍にはしたくないのでそのことはきっぱりお断りした。

言葉はわからないが、身振りしながら単語を少し知っておればなんとか生活ができるものである。

いつ帰国命令が出るかと毎日毎日待ちわびていたの

である。昭和二十四年六月に富内岸沢全農家に帰国命令が出された。本国に帰れるぞ。その感激は忘れられない。帰国準備に大わらわ。持ち物に一定の制限があったことはいうまでもない。先ず私は学校をソ連学校長に渡さなければならぬ。その準備が大変なもの、書式は皆ソ連の文字で書かねばならない。

ソ連の女の校長先生は親切な方で、いろいろ御指導下さったことを感謝しています。家族七人リュックサック一個を背負い、蘭泊駅から眞岡まで貨物列車の人となる。収容所に入るのであったが事情があり一夜荷物と一緒に一同外でのごろ寝、小さな子供を伴った家族の状態は筆ではいい表わせない状況であった。

いよいよ収容所での生活、便所、風呂、食事、なれないことばかり、何日だったかさだかではないが、日本の引揚船が入ったぞの聲、徳寿丸に一同気が浮き立った。荷物、身体検査いよいよ乗船となる。船内の人となった時これで日本に帰れるぞと一安心その夜はぐっすり眠られた。

函館港内船中からの市街の景観すばらしい活気にみ

ちみちた様子に、それまでソ連人から日本はさびれた。何もないと聞き続けてきた私にはびつくりするやられたのもししい気持ちが一ぱいだつた。

収容所に入つて間もなく、大戸さんお会いしたい方がおりますのでお会いして下さいとのこと、誰かと思つてお会いした。私は伊達市関内小学校長の片平というものであります。今回の帰国者で大戸さんがおられますことを知りました。是非私の学校に奉職してほしいとのこと。私は帰国してから何をしようか、仕事があるのだろうかと思つていた矢先のこととてすぐ、私のような者でよければ是非お願いしますと返事をしました。

家族一同知り合いのある苫小牧市に落ち着いてから単身関内小学校志内気分校に務める身となつた。落ち着いてから家族一同をよびよせ生活することとなつた。

分校児童一年、二年、三年、四年までの複々式編成授業に一苦心、食糧のこと、子供達の通学のこと、こゝとばでいいつくせない道が続いた。

それから白老中学校教諭、白老森野小中学校長、壮警弁景小学校長（現在なし）、鴨川町二宮小学校長として四十有余年昭和四十四年無事退職現在にいたつてゐる。昭和六十二年十一月三日勲五等双光旭日章を拝受いたし、身に余る光栄と心から感謝、感激いたしました次第であります。

子供五人はそれぞれ独立社会人として生活しています。家内は七十八歳、私は八十三歳今なんとか健康で暮らしていますが歩んできた道をかえりみて少しでも社会のためにつくして行きたいと思つております。

樺太での終戦、引揚げ、引揚げ後の開拓の労苦

北海道 佐藤 豊 治

一 樺太での終戦

戦争のニュースが、敵機何機撃墜、又は某所を占領とかで日本は勝つものとはかり思つておりました。